

文部科学省共同利用・共同研究拠点 「社会神経科学研究拠点」について

脳科学研究所
松田哲也

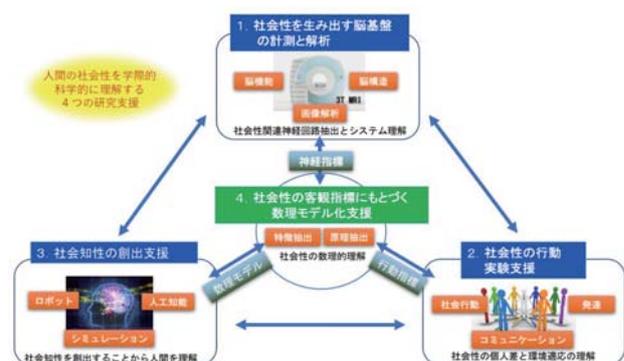
玉川大学脳科学研究所は、平成 29 年 4 月文部科学省共同利用・共同研究拠点「社会神経科学研究拠点(拠点長:小松英彦脳科学研究所長)」に認定されました。この共同利用・共同研究拠点制度は、個々の大学の枠を超えて、大型の研究設備や大量の資料・データ等を全国の研究者が共同で利用し、共同研究を行うシステムです。こうした共同利用・共同研究拠点は、従来、国立大学の全国共同利用型の附置研究所や研究センター、大学共同利用機関等を中心に推進されてきましたが、平成 20 年 7 月に国公私立大学を通じたシステムとして、新たに文部科学大臣による共同利用・共同研究拠点の認定制度が創設されました。

玉川大学脳科学研究所は設立以来、21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラム、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業等の公的研究費の獲得を通じて、学際的脳科学研究を行う研究環境、研究体制の整備を行ってきました。研究面では、特に、感覚認知、社会性、行動選択・意思決定、感情・情動、コミュニケーションといった、人間らしさを司る脳機能の解明を目指した研究を推進してきました。その特徴を活かし、脳科学に関わる研究者コミュニティにも貢献することを目指した「社会神経科学研究拠点」構想をたて、その計画が採択され、この度拠点認定されました。その拠点の中核をなす施設の例として、MRI 施設、社会心理実験施設、赤ちゃんラボ、ロボット工房などがあります。これらの施設は、機器等の整備だけではなく、被験者のデータベースを構築するといった運営も含めて整備してきたところに特徴があります。例えば、MRI 施設は、実験ボランティアが 300 名以上、社会心理実験では地域住民 20 歳～50 歳台の被験者 500 名、赤ちゃんラボでは生後 6 ヶ月から 3 歳までの乳幼児約 2000 名が被験者として登録されており、被験者の確保もスムーズに行うことが可能になっています。

共同研究支援の内容は、① MRI 施設を中心とした社会

性を生み出す脳機能の計測と解析支援、②心理・社会科学実験施設、認知発達実験施設を中心とした社会性の行動実験支援、③ロボティクス施設を中心とした社会知性の創出支援、④社会性の客観指標に基づく数理モデル化支援の 4 つの支援領域から構成されています。共同研究支援の方法は、(1) 単一領域研究支援、(2) 複合領域研究支援の 2 種類があり、単一領域研究支援は 1 つの研究支援内容からなる共同研究の支援、複合領域研究支援は 2 つ以上の研究支援内容からなる共同研究の支援です。尚、研究内容④については複合領域研究支援のみとなります。

拠点としての共同研究支援体制ですが、効率的に研究が推進できる環境の構築と人材育成のための支援として、4 つの支援を行う計画となっています。1 つめは共同研究に関わる事務的な手続き、採択後の施設の使用予約、被験者の手配などを、1 つの窓口で対応する体制(研究支援ワンストップサービス)を整備しました。2 つめは、研究機器の整備として、社会神経科学研究に必要な行動実験、脳活動計測実験に必要な機器を整備しました。3 つめは、共同研究を行うために所属機関から玉川大学までの交通費、宿泊費、実験に必要な被験者謝金、消耗品などの研究経費の支援です。4 つめは、社会神経科学に関連する研究会を公募して、研究会開催支援を行うとともに、拠点主催の研究会、チュートリアルなども開催



し、若手研究者の育成を行います。

拠点の認定期間は、平成 29 年 4 月から 6 年間となっています。拠点の運営については、玉川大学以外に所属する有識者（外部有識者）が 1/2 以上となる運営委員会で議論されることになります。また公募研究の審査についても、外部有識者が 1/2 以上となる審査委員会で審査されます。公募については、平成 29 年度から平成 34 年度までの 6 年間毎年行われます。玉川大学脳科学研究所のホームページ内の「社会神経科学研究拠点」のページに公募要領、公募申請書が掲載されておりますので、ダウンロードの上ご覧いただき、申請いただければと思います。

社会神経科学研究拠点の立ち上げにあたり、平成 29 年 9 月 3 日（日）に玉川大学 University Concert Hall 106 教室でキックオフシンポジウムを開催しました。シンポジウムには、来賓として文部科学省研究振興局学術機関課 西井知紀課長にもご出席いただき、ご挨拶をいただきました。また、特別講演として 3 名の先生から講演をいただきました。初めに（株）国際電気通信基礎技術研究所脳情報通信研究所所長 川人光男先生から「計算論的神経科学から社会神経科学拠点に期待すること」というタイトルで、ヒトのイメージング研究から AI と脳科学研究の接点、MRI の信号のデコーディング技術を用いた精神疾患の診断法への応用といった内容でお話いただきました。続いて大阪大学大学院工学研究科教授 浅田稔先生から「社会性のアプローチ：構成論的発達科学から挑む」というタイトルで、ヒトの発達研究とロボット研究の融合研究についてお話いただきました。最後に東京大学大学院人文社会系研究科教授 亀田達也先生から「人文社会科学と神経科学はどのように連携できるか：社会神経科学研究拠点への期待」というタイトルで、ロールズの正義論に対して社会心理学研究と脳イメージング研究から新たな解釈を導いたという内容でお話いただきました。その他、脳科学研究所教員から社会神経科学研究拠点の概要、支援研究内容、公募要領等の説明なども行いました。参加いただいた多くの方に関心を持っていただき、その後具体的な質問も多数寄せられ、拠点の期待の高さが感じられました。

今回、社会神経科学研究拠点に認定されたことで、玉川大学脳科学研究所におけるこれまでの社会神経科学研究の実績を基盤とし、さらに社会神経科学の「知」をこの拠点に集約することで、学際領域としての社会神経科学の創出を目指して参りますので、皆様方のご支援を今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



拠点長開催挨拶 脳科学研究所小松英彦所長



来賓挨拶 文部科学省研究振興局学術機関課 西井知紀課長



特別講演 ATR 脳情報通信総合研究所 川人光男所長



特別講演 大阪大学大学院工学研究科 浅田稔教授



特別講演 東京大学大学院人文社会系研究科 亀田達也教授